

はじめに

「肖像」^{ポトレイト}は、狭い意味では、人の容貌の似姿を残して後世に伝えることを主要な目的とした人物画や人物像（塑像、彫像など）をさすが、その人物の「個性」という内面にかかわることをも描きだすという面があるために、もつと広い意味で用いられることもある。そのため、たとえば大学図書館の書誌検索で「肖像」の語を打ち込むと、またたくまに六百を超える書物が結果一覧として挙がってくる。

おそらく、この言葉の比喩的な用法のうちでもっとも馴染み深いのは文学的なものである。なかでも実在の人物についての生涯をたどろうとする際に「肖像」の名をつけようとする例は枚挙にいとまがない。実在人物だけでなく、想像上の人物についての物語が「肖像」と呼ばれることも珍しくはない。十九世紀末から二十世紀半ばにかけて英米文学の世界では作品名に「肖像」を冠することがまるで流行であるかのように、ウォルター・ペイ

ター、ヘンリー・ジェイムズ、オスカー・ワイルド、ジェイムズ・ジョイス、デイラン・トマスなどが相次いで「肖像」の作者として名を連ねた。そのペイターによって、すべての芸術が憧れる状態、すなわち、内容と形式の完全な一致の状態に達しうる唯一の表現媒体とされた音楽の世界でも、「肖像」花盛りの文学に比べれば少ないとはいえ、二十世紀の音楽家バルトークやヴェーン・ウイリアムズが「肖像」を楽器や歌声で表現しようとしている。

さらに、「個性」をとらえるという一点にかぎれば、人間ばかりでなく、「個性」と呼ぶるものをもつすべて、擬人化された生物や無生物、場所や時間、あるいは制度や価値といった抽象的なものの「肖像」が存在したとしても何ら不思議はない。異郷で出くわすこまごまとした表層の事象に偏愛の眼差しを注ぎ、そこから事物の奥底の本質をえぐるような重い、しかし魅力あふれる思索に到達する「都市の肖像」を何枚も——ナポリ、モスクワ、ヴァイマル、マルセイユ、そしてパリ——書き遺したのは、ナチスの手を逃れようとしてピレネー山中にみずから命を絶った流浪の思想家ヴァルター・ベンヤミンだったが、プラハ、ブダペスト、カイロ、そして東京などもみずからの「肖像」を掲げてくれる者に事欠かなかった。

都市という空間的存在だけではない。さまざまな時代がその「肖像」を描かれつづけ、

書物の歴史には大小さまざまな時代の顔がひしめいて自己主張をしている。ルネサンス、リネサンス 摂政時代、フアン・ドン・エウール ヴィクトリア朝、世紀末、ベル・エポック、ロシア革命、二十一世紀の「肖像」、日本に目を移しても、明治、昭和、戦後、さらには、団塊、バブルの「肖像」まである。

こうして文字通りの「肖像」から出発して抽象概念の「肖像」にたどり着いてから、フエリックスとポールのナダール親子による「パリの肖像」を手にとると、驚くことに、ここには街角の景色や歴史的イベントではなく、十九世紀後半から二十世紀初期にかけてのフランスの歴史をさまざまな分野で形作った人物——ナポレオン三世から、ボードレール、マラルメ、さらには女優サラ・ベルナールまで——の写真がずらりと、それこそ物が物顔で並んでいる。はるばる遠くへ来たはずなのに、いつのまにか出発点で目にした文字通りの「肖像」に戻っていた。パリという都市、あるいはその都市のある時代の「肖像」を作り出すのは、ほかでもない、そこに生きた人物たちの「肖像」だったのだ。例えば、ベンヤミンもまた、都市と人間の「肖像」は精神的「肖像」と変わるところがないという趣旨のことを述べていた。このように、文字通りと比喩的な意味の肖像は、いつでもどこかできなっている。

本書においても、いま見たような「肖像」という言葉の広がり限定せずに行けるかぎ

り幅広く用いたい。そうすることによって、「肖像」という概念は、文学、歴史、芸術など、人文学諸分野の相互対話と交流のための共通の基盤と、この上ない切り口とを与えてくれるはずである。人文学は、自然科学や社会科学とちがって、人間をとりまく諸現象の普遍的意味を追究するだけでなく、それが人間界を構成するそれぞれの個体の性格にどのように反映され表現されているかをも考察し評価しようとするものであり、したがって、個性と具体性をもうひとつの重要な拠り所としているからである。

本書は、文学、歴史、芸術の多岐にわたる分野で、みずから「肖像」を描く試みを実践してきた者、そして描／書かれた「肖像」を研究の対象としてきた者が、ヨーロッパと日本から集い、みずからの経験や観察を語りながら、過去、現在、さらには未来において「肖像」を描くことの意味と、そこに表現される「個性」の多様性と魅力について、それぞれの立場で推し量り、問い直そうとした試みの記録である。

そのような記録を出版するにいたった経緯について簡単にふれておきたい。母体となったのは、立教大学文学部人文研究センターによって運営されている共同研究プロジェクトのひとつとして採択された『肖像』を切り口とした人文学研究・教育プログラムの開発〔研究代表：小嶋菜温子、二〇〇六―二〇〇七年度〕である。討議、勉強会、論文構想の相互点検などの準備期間を経て、プロジェクトは二〇〇六年十月に立教大学文学部百周年記念行事

のひとつとして「肖像と個性」と題する国際シンポジウムを日英同時通訳付きで開催した。本書の共同執筆者のうち一人をのぞけばいずれも、司会者（小嶋菜温子、浦野聡）、あるいはパネリスト（バーバラ・レウィック、小峯和明、桑瀬章二郎、藤巻明、カレン・フォーサイス）としてこのシンポジウムに直接かかわっており、それぞれの論考はそのときの発表にもとづきながら、パネル同士のやりとりばかりでなく、フロアの参加者から寄せられた質問や注文中に触発されて生まれた新たな展開を織り込んでいく。

シンポジウムに出席せずに執筆しているのは、二〇〇七年度から新たにプロジェクトに加わったアンヌ・コルヌルーである。これは、シンポジウムの成果を踏まえて「肖像」についての論集を世に問おうとする際、「肖像」の発展にとつてきわめて重要な西欧ルネサンス時代が欠落しているのは望ましくないとの執筆者全員の判断による。また、シンポジウム当日に司会を務めた二人もそれぞれ、浦野がプロローグとして西洋における「肖像」の成立までを概観し、小嶋がエピローグとして、「肖像」にとどまらずもつと広く日本上古の物語というフィクションにおける表象の軌跡をたどり、ここでもやはりまとめ役を果たしている。

蛇足ながら、立教大学が貴重図書として購入するにあたり、資金の一部を本共同研究プロジェクトが負担した『竹取物語絵巻』は美しい上中下三巻の巻物からなり、現在人文科

学系図書館特別書庫の所蔵品として、インターネット上で常時デジタル展示されている。そのなかの絵の一枚が小嶋の論考の図版として用いられているので参照されたい。なお、海外から寄稿した三名の文章は、まずそれぞれの母語である英語（レヴィックとフォーサイス）とフランス語（コルヌルー）で書かれ、それを論文末尾に記した翻訳者が日本語に直したものである。

このような国際的共同研究から生み落とされた書物のなかに、きわめて魅力的でありながら、何らかのかたちで絵画的資料と文字資料のかかわりを論じ、しかも、「肖像」として描／書かれた者の内面にまで踏みこまなければならないために一筋縄ではいかない主題と、各執筆者が——文字と絵画への比重のおき方、対象とする時代などはそれぞれが違って——いずれも真剣に格闘した痕跡、および、シンポジウム会場を包んでいた熱気の反映を感じとってもらえるとすれば、執筆者一同これほどうれしいことはない。さらに、本書が読者の知的好奇心を喚起し、「肖像」とそこに表わされる「個性」の実に多様な姿について、思いをめぐらすきっかけとなれば望外の喜びである。

二〇〇八年三月